

創価学園・創価大学と創立者（第3回）

神 立 孝 一

皆さま、おはようございます。学長から挨拶がございましたけれども、去年は東日本大震災で夏季大学講座が開催できませんでした。去年の3月はそれぞれ皆さん、忘れられない一日になったのではないかと思います。創価大学も開学以来の被害だと思いますけれども、僕の研究室はA棟の7階にありますが、ありとあらゆる本が落ちまして、廊下側のガラスが割れました。僕もすぐ大学にきましたが、エレベーターが動きませんでした。そこで階段を使って7階まで上がったのですが、悲しいことに息切れがして自分も動けなくなってしまいました。そういう状況で自分の研究室のドアを開けたのですが、悲惨な状況でした。ですから何も見なかったことにして帰りました。

昨年開催されれば、「創価学園・創価大学と創立者（3）」をお話しして終わる予定でした。それを今年にもち越してしまったわけです。当初は1回で終わるつもりでしたが長くなってしまいました。

今日は以下の順番でお話しさせていただきたいと思っております。

1. はじめに
2. 1期生の卒業とその後の学園
3. 創価大学の開学と創大生
4. 草創の三部作を読む
5. むすびにかえて

1. はじめに

まず簡単に自己紹介をして、それからさらに私のいい訳を聞いてください。私は、神立孝一と申します。神様が立つ、と書きます。本当にうちの大学には相応しくない名前でご迷惑をおかけしています。親がこういう名字だったもので仕方ありません。茨城県土浦市の先に

Koichi Kandachi（創価教育研究所長）

*2012年8月24日に開催された「第39回夏季大学講座」における講義「創価学園・創価大学と創立者（3）」に、加筆訂正をしたものである。講義を聴いてくださった方々から、さまざまなご質問やご意見をいただき、内容を精査することができました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

「神立」というところがあります。そこの発音は「かんだつ」です。僕の家系は、「かんだち」と発音します。東京で生まれました。創価中学の1期生です。1968（昭和43）年に学園ができたときに創価中学に入りまして、そのまま高校の4期、大学の4期ということですと創価教育の道を歩ませていただいてまいりました。

1983（昭和58）年に創価大学に経済学部の助手として勤めさせていただきました。僕の師匠は関順也先生で創価女子短大の初代学長をされた方です。女子短大ができたときに関先生がそちらへ籍を移したので、私がある関先生の研究室を受け継ぐ形になりました。創価大学経済学部の歴史は40年近くになりますが、助手はこれまで私一人だけです。私だけしかなくて、そのあと助手は採っていません。ですから経済学部のなかでも、そのままずっとどこへも動かず、そのまま育てていただいたことになります。

2006（平成18）年に創価教育研究所ができました。この研究所の目的なのですが、現在、日本全国におよそ600の4年制私立大学があります。それぞれの大学が社会に対してどのような責任を果たしてきたのか、ということをしきりと証明をしなくてはならない。証明をするためのもっとも重要な点が、大学の歴史であると考えられています。そこで University Archives といういい方をしますが、欧米の大学などでは必ずそういうセクションがあって、自分たちがやってきたこと、自分たちの大学でつくった資料等を一般に公開する。こういう形での仕事がずっとなされてきています。それが日本ではあまりなされていなかったのですね。そういう理由から大学で歴史をきちんと残していこうということで、これは東大が一番はじめにやりだしました。東京大学それから慶應義塾大学、早稲田大学でも順次とり組んでまいりました。創価大学も、もうすぐ50年になります。1971（昭和46）年が開学ですから、2021年がちょうど開学50周年です。ですから50年を期して『創価大学50年史』をつくろう。各大学でも30年とか50年、80年、100年。慶應義塾大学の場合は150年なのですけれども、大学の歴史を本にまとめて皆さんに見ていただく。そこで大学がやってきたことを知っていただき、大学自体の責任を明確にしていこうということで、そのような仕事が進められてきました。創価大学でも歴史を残すということで創価教育研究所ができました。僕は経済学部の所属で、日本経済史という歴史を扱うのが専門分野です。とくに僕の研究の主対象は、江戸時代なのですね。江戸時代の研究に何が必須なのかというと、和紙に墨字で書いた古文書を読むことです。それができないと仕事にならないのですね。それに関連して、古い資料をどのように残していくのかとか、どのように保存していけばいいのか、ということも研究しなければなりません。この研究所ができたときに、たとえば牧口先生が直筆で書かれたもの、あるいは戸田先生、池田先生が直筆で書かれたものをどう後世に伝えていくのか、そのような部分の仕事をしろ、ということで所長の任命を受けました。この2006年からずっと所長をさせていただいております。本人としては、後進に道を譲りたい、といつも思っているのですが。

2010（平成22）年に経済学部長を拝命致しまして、今年でちょうど3年目になります。所長兼務ということになりました。

さて、創価大学1期生といいますと、皆さんよくご存知の方では理事長の田代康則さん、高校の1期生です。アメリカ創価大学学長の羽吹好史さん、高校の1期生です。創価大学に副学長は2人いるのですね。馬場善久副学長、高校1期生。寺西宏友副学長、中学1期生です。私と同級生です。なんと13歳のときから一緒ですから、もう45年も一緒にいるのですね。そういう先輩・同輩たちがいるものですから、創価大学の草創の頃の話を経済にきちんと残そうじゃないかと、短大前学長の石井秀明さんとかですね、先輩たちをみんな口説き落として、こういうような教室で草創の頃の話をしていただいたのです。それはそれは面白い話なのです。高校の1期生というと神様のようにお思いかもしれませんが、なんのことはない。大学時代は授業さぼって麻雀をやったり、パチンコ屋に入り浸っていたり、などという話を先輩たちがしてくれるのですが、それも一つの歴史だなと思っています。あの人たちはいつも勉強ばかりしていたという話だと面白くないですが、そういうなか、どういうことで自分は変わっていったとか、何によって自分は大学のために尽くそうと思ったとか、そういう話を講演で聴いてもらうということはすごくいいことだと思ってやってきました。そうしたら、うちの研究所の若手の教員から、所長の場合はどうでしたか、と。所長は人にやらせるばかりで自分が話してないではないですか、少しでも話して残しておく義務があると思いますよ、と責められまして、それで3年前にこの話をしようと決意して、自分でいろいろなものをひっくり返して調べてみたのです。そうしたら自分で知っている部分と、自分が知らなかった部分があって、創立者の気持ちとか創立者のご指導などでも記憶に残っているものと、記憶に残っていないものとあるのです。記憶に残っているものは通常文章に表れてこない、よくいわれるところの行間に滲み出るようなものがある、それを話したほうがいいのではないか、ということで話を始めました。

1回目に中高6年間のことを話して、2回目に大学4年間のことを話そうと思っていたのですが、1回目で中学2年生までしかいなくて、2回目もやらせていただきました。2回目は中学、高校卒業時までやるぞ、という思いでやったら中学の卒業までで終わってしまったのです。ですから今日はこのシリーズは絶対最後にするぞ、という決意で来ました。

個人的には自分の体験を話すというのは、あまり得意じゃないというか、好きじゃないのです。恥ずかしいですね。体験発表が得意な方はたくさんいらっしゃると思いますが、僕はあまり得意じゃない。自分の過去をほじくって、なぜ皆さんにお見せしなくてはならないのかと思ってしまふからなのです。過去を振り返ってみると恥ずかしいことばかりなのです。なぜ創立者の気持ちがわからなかったのだろう、なぜこんなときにこんなふうになってしまったのだろう、とかですね。こういうときになぜきちんと意思を創立者に伝えられなかったのだろう、というような反省点ばかりで、あまり話したくないのですけれども、僕の反省を聞いていただこうと。こんな愚かな者もいたのだな、とでも思っていたいただければいいかな、と観念してはじめて次第です。長いいい訳になりました。

今日は予定では、お示しましたように学園時代の最後、高校の3年間と、それから僕たちが高校で3年間過ごしていた間に大学ができて、大学で草創の3年間が歴史として刻みつけら

れていきました。先輩たちが学園に帰ってきてくださるのですね。そういうときの話も織り交ぜながら草創の大学のことをお話したいなと思っております。

まず今日の講座の目的です。創価教育の実践の場でいかなる人間教育がなされてきたのかを自分なりに振りかえる。僕自身の視点ですから、一般論としていえるのかどうかは自信がありません。ただし、創価教育を受けてきた人間がどのように感じたのか、これはお伝えしたい。創価教育の実践の場といいましても、これは無数にあるといいと思います。たとえば、この創価大学で教育を受けて創価教育はこうだ、という気持ちをもって、小学校や中学校や高校で実際に生徒たちを相手に教えても、ここは当然創価教育の実践の場ですよね。ですから、教える教員が創価教育というものをきちんと体験していればそれはすべて創価教育の実践の場ということになるわけです。これは一つの考え方です。

もう一つの考え方は、やはり創立者がつくられた教育の場が、狭い意味で実践の場だ。なぜならば、そこで創立者と学生との間のさまざまな交流があり、そこで創立者の示していただきたいいろいろなご指導、姿勢、態度。これがやはり本当の創価教育の実践の場だ。こういう考え方も成り立つわけです。それも含めつつ、創価教育とは何かということをまず考えてみたい。その意味で創立者のご指導を再読して、創立者の思想を明示して、その普遍性に迫りたいと思います。創立者はいろいろなことをおっしゃっているのですけれども、そのなかにある普遍的なもの、それを探ってみたいという気持ちがあります。そのためにも、もう一度丹念に、創立者がとくに教育の場、大学で、学園で述べられたさまざまなことを、少しずつ解きほぐしてみたいのです。

皆さんはたくさんご指導とか、伝言とかメッセージをお聞きになっていると思いますが、今日は細かく切り刻んだ形でやってみたい。これは一つのやり方で、正しいかどうかはわからない。しかし、一つのやり方だということなのです。この作業を通じて創価教育とは何か、これを考えてみたいと思います。大学もそうですし学園もそうですが、教育に携わってきた教職員は皆これをどこかで考えているはずだし、考え続けています。なかなかこれだという結論が出ないのですよ。難しい。自分でやってみてよくわかりました。教育というのは一番重要な作業だといいますが、それであるが故に非常に難しいと感じます。けれども考えなければいけない。これを考え続けていきたいと思います。

復習です。一昨年の「創価学園・創価大学と創立者（2）」でやった最後のまとめを再度ここで確認して先に進んでいきたい。それは次のようなことでした。創価という名前のついた創価教育の実践の場、すなわちそれは学園なわけですが、はじめての卒業生を出した。創価教育というものを行って一応は完成した形。そのときに創立者がその卒業生に何を託そうとしたのか、何を伝えようとしたのか。それを確認して、前回終わったのですね。それをここで、再度確認してみたいと思います。

「諸君に望みたいことは、この三年間、折にふれて話をしてまいりましたように」（『池田大作全集』第56巻41頁）

とメッセージに述べられていますが、本当にありとあらゆる観点から創立者は話をされています。

とくに多かったのは、開校して3年間のうち、後半の1年半ぐらいですが、生徒たちと会ったいろいろな会合で行われた質問会でのお話です。先生が自らテーマを定めてお話しされるのではなく、むしろ生徒たちの疑問に対して答えていくという形式をとりながらご自分のお考えを述べられている。そのなかで、

「人間らしく、自分らしく生きてほしい」(同)。

これをずっといつてきたのだ。確認作業ともいうかたちで先生がおっしゃっているわけですね。

「これだけが、私の祈りともいうべき願いです」(同)。

こういわれています。何も決まりきった形の、枠組みにはまった、そういうようなことを君たちに望んでいるのではない。自分らしくやってもらいたい、これをずっとおっしゃっています。そして、だからこそ、

「決して背伸びする必要はない。外面や体面だけを考えて自分を飾る必要もありません。

そうした虚構の人生だけは歩んでほしくないのです」(同 41-42 頁)。

それで考え方をさらに発展させます。

「真実の人生とは何か」(同 42 頁)

ということで、ぐっと踏み込んでいくのですね。

「自分らしく、個性豊かに進む人生でありましょう」(同)。

これは一貫しています。同じことをずっといわれています。

「また、人生においてもっとも尊いものは何か。だれが何といおうと、自分の信ずる道を、胸を張って堂々と貫いていくことに尽きるでありましょう」(同)。

つまり自分の信じた道を歩くことが自分らしい生き方じゃないか、こう高校生に向かって先生は叫ぶわけです。それで最終的にどうなっていくのか。後になって考えますと、これは生徒だけではなくそれに関係する教員、職員含めて全部問題になってくることだと思いますけれども、

「学校で学んだことが教育のすべてではありません。アメリカの自由思想家エマーソンは『小学校、中学校、大学で教えられることは教育ではない。教育の手段である』といっております」(同 43 頁)。

あくまでも手段である。教育そのものではない。教えられている内容がどうのこうの、そういう問題ではないのだ、ということですね。前回の結論にあたる部分になっていますが、

「諸君が受けた教育の真価は、諸君の人生に臨む姿勢で決まるということです」(同)。

卒業生がどういう人生を歩もうとしているのか、その人生をどう捉えるのか、これが最終的に教育の価値を決める、ということを書べられています。これを僕たちなりにもう一度考えるとどういことになるのかというと、

「私は、諸君の見事な成長を信じております。諸君の成長を至上の楽しみとしています。

21 世紀の命運は、ひとえに諸君の双肩にかかっていることはまちがいないからです。不信と断絶を越えるもの—それは深い哲理に基づく、人間性の絆しかなくとも明瞭であります。

どうか、創価学園第1期生の自覚を生涯忘れることなく、大樹と育ち、栄光に満ちた人生の

大道を歩んでください」(同)。

となるのですね。さっきの、

「諸君が受けた教育の真価は、諸君の人生に臨む姿勢で決まる」(同)。

自分たちがどういう生き方をしていくのか、どのような人生をこれから歩いていくのか、ということ先生は問うているわけで、これは期待でもあるし、教えでもある。教育というのはすべて教育を受けたその人間の生きざまなんだ、ということですね。生きざまがどうなのか、ということです。その生きざまというのは人に褒められたり、認められるということを目的に生きるのではなくて、自分らしく生きていくことなのだ、ということだと思うのですね。

これが今日のスタートラインです。そのうえで、創価教育が3年経ち、4年経つなかでどのように創立者が生徒たちと接触し、学生たちに何を話しかけたのかを追求してみたいと思っています。

1期生が卒業して1971年4月に創価大学が開学いたします。創立者のいろいろなお考えがあって2年前倒しになっています。もともとの計画では1973年4月に開学する予定だったのですね。それを2年前倒しして1971年に開学いたしました。だから3期生は、自分たちがもともとの開学のときにあたる入学生なのだから、「本門の1期生」といわれてですね、胸を張っておられた。ただし、このような一面もありました。僕たち中学1期生は中学1年生のときに数学の中学1、2年生の分を終ったのです。スパルタもいいところです。寝る時間も3時間、4時間でした。中学2年生のときに中学3年生の教科書を終ったのです。中学3年生で何をするかというと高校1年生の数学をやったのです。ところが高校の3期生は高校に入学して高校1年生の数学をやるわけですよ。創価学園の開学から3年目というのは、中学3年生と高校1年生は、同時期に高校1年の数学をやっているわけです。どういうことがおこるのか。中学3年生の優秀な子は数学がとてできます。高校1年生の数学が不得意な人は、中学3年生よりもできません。そうすると寮などでは高校1年生が中学3年生に勉強を教わるという、とても愚かなことがおこるわけです。そんなことがおこったら後輩たちが先輩を尊敬するはずがないじゃないですか。ぜんぜんあいつらできないぞ、みたいな話になって。やっぱり勝ち誇りたいわけですよ、後輩としては。人の欠点をつく楽しさをそこで覚えるわけですね。僕たち高校に入ったらまた高校1年生の数学をやるわけですよ。真面目にやるわけがないじゃないですか。同じこと2回も。そういうことがおこっていた。

僕らが大好きだった高校1期生。大好き、なんていい方はおかしいですが、開学のときは中学1年生と高校1年生しかいないのですよね。だから僕たちが中学1年生のときの先輩は高校1年生だったのです。1期生です。2年生、3年生いないわけでしょ。ぜんぜん年齢が違うわけですよ。第1回入学式、いまでも覚えています。講堂に高校1年生が颯爽と入って行って、すごく盛大な拍手。中学1年生が入ってきた。皆大笑いで拍手。可愛い、などといいながら。高校1年生と中学1年生では大人と子どもの違いがあるわけですよ。人間が歩いているのだから、制服が歩いているのだからよくわからないような子どもたちが入ってくるわけですから。僕たちは高校1

年生に本当にいろいろなことを教わりました。面倒みてもらいました。だから小生意気な中学生になったのです。はじめから、君たちはこれを読んだか、とか、こういうこと知っているのか、と追及されるわけですね、高校生から。そうしたらちょっと生意気になるでしょ。あとから高校2期生が入ってくるわけですよ。いうこと聞かざるがたいじゃないですか。その頃から、僕らずっと生意気だっていわれて育ってきました。先輩たちに、おまえたちに背中を見せるといつ後ろから蹴飛ばされるかわからない、お前たちは味方のように敵でもあるのだ、とかいろいろなこといわれながら育ってきました。その1期生が卒業してしまったのです。大好きな先輩が。大好きな先輩なのだけれど、僕らの頭を押さえ、蓋をしていた先輩たちがいなくなったわけです。そうするともうこっちのものです。私たちはやりたい放題です。そういう高校3年間。

その3年間で創立者と学園生との懇談会がいろいろな形であって、そういう会合を数えていたら34回ありました。その間に大学もできています。先生は大学にも行かれています。はじめの3年間で創立者と創大生がさまざまな協議会とか懇談会とか記録が残っているものだけで38回あるのです。学園ができて大学ができて、3年おきぐらいにいろいろなものができ上がってきますけれども、生徒・学生等との会合の合計は、3年間で72回ということになります。毎月1回どこかで先生は必ず生徒や学生の顔を見ていることになります。それが創立者の親心ですね。見られているときはわからないのです。この歳になってやっと、なるほどなと思います。

1971年といいますと先生は1928年生まれですから43歳です。43歳はまだ若いですよね。いまの僕よりかなり若いです。歩くのは早いし、一緒になって卓球、テニス、バレーボール、水泳、なんでもやってくださいましたからね。だから僕らからすると、創立者というより父親というか、そんな感じでした。その意味では雲の上の人という印象はまったくありません。自分たちを本当によく理解してくださる、一番自分の身近にいる大人。こういう感覚でした。いいか悪いかわかりません。おまえいいかげんにしろという人もいるかもしれませんが、そういう感覚だったのです。まだ中学生でしたから。

今日は1971年から1974年まで、創立者がどういことを語られたのかということ、高校生と大学生に分けてお話ししたいと思います。午前中は学園の3年間をお話しします。その後、大学の3年間をお話しします。前後してしまうと違う時間のように思えてしまうかもしれませんが、両方とも同じ時期の話です。同じ時間が並行して進んでいるということを念頭におきながら、午前中の話と午後のお話を聞いていただければと思います。そのなかで、創立者の教育観と人間観を探り、創価教育について考えてみたいと思います。

2. 1期生の卒業とその後の学園

まず、高校1期生が卒業した年、1971（昭和46）年。この年は、牧口先生生誕100周年です。牧口先生は1871（明治4）年生まれです。この年の9月24日に中学・高校の寮生と下宿生との懇談会があって、そこで先生がおっしゃったことは、

「君たちが、それぞれの分野で、完璧になることが偉大なのです」（『池田大作全集』第56

巻44頁）。

完璧ということは非常に難しく、何が完璧なのかも難しいですけども、自分が完璧なものを目指して努力をしていくこと。その分野は自分に任せておけ、と。そういう人間になることが大事で、そのための授業だ。こういうお話であったという記憶があります。さらに、

「自分たちが入った学園だから、学校に何かしてもらうのではなく、自分の責任において努力し、建設していきなさい」（同45頁）。

こうおっしゃいました。これは2年前の夏季大学講座で僕の経験をお話しした部分と重なります。中学3年生の夏休みに臨海学校がありました。三崎で開かれています。7月でした。この三崎の臨海学校に先生がおみえになりました。僕たちは昼間泳いで、夜、三崎の会館に戻ってくるのです。先生が「庭のほうにおいで」と呼んでくださいました。そこで、とうもろこしだとカスイカ、蒸かしたジャガイモをご馳走になりながら、先生といろいろな懇談がありました。中学1年生、中学2年生、中学3年生と順番に並んでいたのです。そこに先生が来られて、一人一人の顔をご覧になって。中学1年生ははじめての夏休みです。先生は「知らないな」、「はじめてだね」、「顔覚えておくよ」とおっしゃりながら。2年生になると1年半いますから「わかっているよ」、「よく来たね」といわれながら。3年生になると古株ですから先生は顔をよくわかっているわけですね。僕なども中学2年のときに毎月1回、食事をさせていただいたこともあって、僕の前に来られた時、先生のにこやかな顔がぱっと変りまして、目つきが鋭くなって。これは一番怖い目なのですけどね。それで「学園に甘えてはいけな。母校を護れるような人間になりなさい」。そう厳しくいわれたことが僕の原点になっています。3年生は、もう3年間いるのだから、高校に入ったら4年目ですからね。そういう生徒たちに対して、何かしてもらうというのを考えるのではなく、自分でどうしたいのかを考えなさい。こういう教育方針ですね。だからある種、獅子が子どもを崖下に落とすような感じです。片一方では頑張れと激励をしてくださるのですけれども、もう一方では甘えるな、と。そのときそのときに合わせて先生はご指導してくださっています。

それから、1971（昭和46）年12月に栄光第3寮ができるのです。これは現在の創価中学校の校舎のところに建っていた寮です。現在は、鷹の台の駅の方から歩いて行きますと、道路を挟んで左側が高校で右側が中学校の正門になっていますが、右側の中学校は当時、全部寮だったのです。1寮、3寮ができるのですが、1寮がいまの中学校の校舎があるところ、そして3寮が校舎と直角に建っていました。

12月11日に栄光第3寮の完成記念学寮祭がありました。その懇談会でのお話です。ここでは質問会になりました。生徒の側の質問です。どういう質問だったかというと1つ目は、詩集『草の葉』について。『草の葉』というのはその当時、先生がずいぶんいろいろなところで語られていたホイットマンの詩集です。お読みになった方はたくさんいらっしゃると思いますが、僕も高校1年生のときに読みました。チンプンカンプンでした。何がいいのかわからない。先生がどこに感動されたのかわからない。そんなものです。たぶん、そういう生徒が結構いたと思い

ます。そのホイットマンの『草の葉』について、ある生徒が質問したのですね。『草の葉』はどう読めばいいのですか、と。先生はそこでどうおっしゃったかというと、生徒の気持ちをよくわかっているのですね。このようなお答えをしてくださいました。

「微分、積分などでも、今はわからなくても、大学へ行ったらわかる場合があります。哲学にしても、今はわからなくても大学へ行ったらわかる人がたくさんいます。同じように、たとえ今、ホイットマンの詩がわからなくても、別に頭が悪いのでもなんでもありません。中学3年生で理解するのは、少し無理だと思います。この詩は、大学の3年、4年から、インテリ級の詩が好きで、あるいはもっと年配の思想家たちが、非常に愛好してきたのです。だから中学生でわからないからといって、決して落胆しないでください」(同46-47頁)。

よほど落胆していたのですね。中学3年で、自分たちが読んだ本で何いつているのかわからない、という感じでしょうね。当時は、ものすごく本を読まされました。読まれた、というのがあたっていると思います。自分で読みたくなかったから、読まれたのですね。与えられました、本を。次から次へと。僕の場合でも、高校1期生の卒業の前です。昭和45年でしょうか、その当時、読書ノートをつけろといわれました。読書ノートをひっくり返して見てみると、中学3年生のときに年間200冊は確実に読んでいます。230というところですかね。読んでわかる本とわからない本があるのです。中学2年のときに、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』を読んだのです。ぜんぜんわからなかった。読んだ、というだけ。50代になって読み返しました。これは中学生には無理だ、とよくわかりました。読んでわからなかったけれども、読んだ感覚は壮年になってから生きてくるのかもしれないですね。その頃の財産を食いつぶして生きているのではないかと、そんな気もします。「若い頃は読書をしなさい」とよく先生はおっしゃるのですが、間違いなくそうですね。よくいわれるのは、若い頃読書をした人は年をとってから決して、いまの若い者は、といういい方はしなくなる。これは常にいわれているけれども、若者から、この人は本当に若者の気持ちがわからないな、といわれるような人は、わりに読書は少ないというのですね。今となっては遅いけれども、もっと本を読んでおけばよかったとつくづく思います。時々、若者の気持ちがわからなくなるときがあるものですから。大学にいながら、何を考えているのだろう、この人たちは、などと。読書の差はあるといいますね。学生の皆さんにも読め読め、といっています。読めといってもいまはインターネットしか読まない。携帯電話を離さないですからね。

それから次です。寮生活のなかでの先輩、後輩の関係についての質問。つまり寮では先輩、後輩と一緒に生活しますから年上の先輩とどうつきあえばいいのかを悩んでいた生徒がいて、その人が質問したのですね。

「寮生活については、みんなで話し合っていきなさい。子どもではないのだから、一個の立派な人格なのだからみんなで話し合いなさい。堅苦しいいい方になりますが、どうか、自由奔放のなかにも、目に見えない一つの法則を尊重しながら、人間主義、人間共和という原点を忘れないで、創価学園の寮生活が一番模範的であり、見事だ、と結果的にいわれるよう

になってもらいたいのです」（同 47-48 頁）。

こう答えられているんですね。

「寮生活自体が最高の指導であるし、最高の教育であり、人間教育でもあります。団体生活というものは、また社会というものは、100 パーセントの理想的な結論がでるということはありません。75 パーセント成功すれば、100 パーセントの成功と思っていいのです。100 人いて 100 人全員が、心をつにして、和気あいあいと 3 年間一緒に、何事もなく過ごすということはあり得ません。何人かの人は全体にそぐわないかもしれないし、何人かは批判的であるかもしれない。75 パーセントまとまれば、一つの核ができあがるのです。そうすれば、それは成功だと思ってまちがいありません」（同 47-48 頁）。

ひとつの法則がありますね。4 人のうち 3 人がまとまったらいい。組織というのはそういうものだ。100 人が 100 人とも、いいなんてことはあり得ない。こういう哲理、法則を中学生、高校生にむかって説いているわけです。

社会のなかにおける調和の必要性について。これも難しい話ですが、

「社会にあつては調和を考えていくことが大切です。調和をとるといっても、その調和の主体者である人間や、人間の頭脳には、哲学の裏づけが必要です。それを土台にして人間性を磨き、社会を形成していかなければなりません。政治でどんな手を打とうが、科学がどんなに発達しようが、根底的には哲学に帰着する以外に方法がないと思うのです。いい換えると、人間を革命する以外に道はありません」（同 48 頁）。

哲学というとなしく思うかもしれませんが、学問的な哲学の定義づけは、人間がどのように考えるのかを考える学問です。つまり、人間が根底的に何を基準にして正邪を判断するのか、それについて誰にでも説明がつく基準のことを考え続けることが哲学だ、ということになれば、これは当然、先生がおっしゃるとおりのことになるわけですね。その哲学がなかなか身につかない。状況、環境、人間関係、いろいろなもので哲学がぐらつくのですよね。いままでいいといっていたのに、突然だめというとか。ありますよね、そういうこと。人によって使いわけも起こる。それは哲学ではないのですね。根底的にここだけは絶対に譲らない、そういうことが必要だということですね。

生徒会の組織について、またそのあり方について。組織論になります。高校生、中学生に話しているので本当にわかりやすいですよ。大人に対するいろいろなご指導がありますが、ずっとわかりやすいです。読んでいてもわくわくしますね。

「組織のあり方については、どこの国家でも、どこの社会でも、団体でも模索しているのです。組織は状況によって異なる場合がありますが、結局、一個の人間から出発しています。そして、有終の美を飾るのも人間です。組織は、目に見えないのですから、人間を基準とし、人間を原点としなければなりません。権威的になってはいけないうし、人間が縛られるようなことがあってもいけません。私も試行錯誤を繰り返しながら、一生懸命考えて組織をつくりあげてきました」（同 49 頁）。

創立者も、やはり、悩んで苦しんで、いろいろなことを考え抜いて、組織をつくり上げてきた。ここに我々が創立者の創立者たる所以があるのですね。また、それを赤裸々に生徒の前で表現するということは、なかなか普通の大人はできませんよ。僕などは、悩みなどは絶対いうものかと思っていますからね。試行錯誤してきた、ということ率直に語る。創立者のこうしたお姿が、中学生、高校生にとっては、ひとつのモデルになります。

「自分たちの手でやっていくことが生きた学問だし、血の通った本物の組織です。自分たちで体験し、自分たちで工夫してください。それが、最高に理想的な組織のあり方だと思います。しかし、現実には、すべて理想的にうまく運営されていくということは、まずないと思います。実際に苦しんで運営するのと、理屈のうで考えるのとでは、天地雲泥の差があるのです。今の君たちの場合には、自分でやってみることが必要なのです。真実は身近にあるものです。組織は結果としてできるものですから、はじめから立派な組織をつくろうと思わなくてよいのです。組織をつくったからよくなるということではなくて、必然的に組織が必要となってきたから、一つの法則が必要になってきたから、効果的な組織をつくるのであると考えてください」(同 49-50 頁)。

心にしみますね。日々、いろいろなことがありますので。こういうことを生徒に語られています。

1972(昭和 47)年 3 月 18 日の第 2 回卒業記念謝恩会。先生は第 2 回卒業式にはご出席されませんでした。卒業式が終った後の謝恩会にはご出席されて、そこでスピーチをされています。学園の場合、式典そのものにご出席されるということは、開学の当時ありませんでした。僕らの第 1 回の入学式も出席されていません。終わった後におみえになりました。一緒に写真を撮っていただきました。第 2 回ですから 2 期生が卒業するときです。

「新しい伝統をつくっていくところに尊さがあります。それは、現在と未来が一番尊く、偉大であるということなのです」(同 52 頁)。

ここで次の話ですが、皆さんと考えたいな、と思っていることのひとつです。2 期生が卒業するときに、正義について語られるのですね。正義というと、大人がすると一番難しい話の一つですよ。正義といっても人間の数だけあるではないか。戦争をしているところも片一方は自分たちの正義、他の一方も自分たちは正義。正義と正義がぶつかり合っているわけですから。正義の人になりなさい、といわれたときにどういう人になればいいのかという話です。先生のおっしゃる正義の定義づけを、僕たちがどう捉えればいいのか。それを考えるヒントがここにあるのですね。

「正義の人になっていただきたい」。「正義とは何か—これはまた、価値観の問題で非常にむずかしい。私は諸君に、正義という意味において、悩める人、苦しんでいる人、不幸な人、すなわち庶民の側につき、たとえ自分がどんなに偉くなったとしても、その姿勢だけは崩さずに生きていってもらいたいのです」(同 52-53 頁)。

こういう定義づけなのですね。正義とは何か。「悩める人、苦しんでいる人、不幸な人、すなわち庶民」。こうした人の側について行動すること。これはいかなる思想、いかなるイデオロギーであったとしても、まったく別の思想、まったく別のイデオロギーであったとしても、自由主義

であっても共産主義であっても、これこそが普遍的な正義ではないのか。つまり悩んでいる人、苦しんでいる人、不幸な人を救っていく。その側に立って一緒になって悩んでいくのだ。苦しんでいくのだ。それこそが正義だ、と定義づけをした場合にこれはすべてのイデオロギーも越えし、普遍性につながる、と考えます。これもそのときにおっしゃっているのですが、

「制度の改革を行おうとする場合や、大きい思想や信念をもって行動しようとするれば、そこにはかならず批判が起こるのは、当然の原理です」。「本質を見ぬいていける人間になっていただきたい。そのためには基準が問題です。何が基準かといえば、やはり人間が原点です」（同 55 頁）。

正義も、人間が原点です。いかなる考え方をもっているでもいい。けれども弱い人の側につく。そして行動する。弱い人を守るのだ。その行動をするのだ。これは普遍的な原理なのだ。こう私たちは語っていると思います。いかにも正義の人という、お前たち自身が考えていることしか正義だと思っていないだろう、という批判が必ず出ます。必ずそういう批判が出てきます。正義とは何か。人間の側に立つことだ。人間が原点だ。人間はいかにあるべきなのか、人間はどうなれば不幸でなくなるのか。私たちは、その側に立っているのだ、と。それこそが私たちの正義だ、ということであればこれは誠にをもってわかりやすい概念になります。これがどうしてもいいかったことの一つです。ともすると、先生だから正義正義というのだ。先生は正義だ。僕たちはそれで終わってしまいがちですね。それで終わってしまうとなんの意味もない。それを聞いて、生徒として、学生としてどう普遍的なものにしていくのかが、僕たちの仕事になってくると思うのです。正義の問題であるとか、人間の問題であるとか、それを考え抜いていくことが創価教育に与えられた大きな課題だと思います。

次の話です。先生はいろいろなところでスピーチされますが、1973（昭和 48）年、学園でのスピーチのなかで五つの提言が続きます。言葉づかいが鮮やかですね。なぜにこんなに言葉づかいが鮮やかなのだろうと自分なりに検討してきたのですが、やはり読書ですね。先生は詩をたくさん読まれていますね。詩をたくさん読んでいるから、ものすごくたくさん言葉をご存知です。多くの人が共感する言葉を選ばれます。これが素晴らしいですね。言葉は人を納得させるものだから。五つというのは非常にわかりやすいですね。

五つの提言の一つ目。1973 年 3 月 15 日の創価中学・高等学校第 3 回卒業式、3 期生の卒業式のまず、一つ目。

「諸君は今、限らない可能性を秘めている」。

可能性に言及します。可能性があるのだよ、君たちは。その可能性を伸ばすために何が必要かという、

「意志を強固にもて」。「自分のよき可能性を信じて、それに挑戦していただきたい」と期待を込められています。「限らない可能性を秘めている」のだよ。だから「意志を強固にもて」（同 64-65 頁）。

これが一つ目のフレーズです。

二つ目、「友情の絆を尊べ」。終生変わらない友情が大事だ。

「諸君の親友は、なんの利害にも左右されることなく、また、なんの構える必要もなく、終生変わることなく、ありのままの素朴さで、互いに一切を理解してあやまたない人であります。このような友は、少年時代、青年時代の純粋な友情の絆によって結ばれているからであります」(同 65 頁)。

たしかに創価教育のホシの一つ、核の一つは友情です。さっきも話しましたがけれども、中学1年生のときから寺西副学長と一緒に。お父さん、お母さんもよく知っているし、彼の奥さんのこともよく知っている。彼のお子さんたちのこともよくわかります。彼は僕の家族のことはよくわかっていて、まったく気兼ねがありません。家族の悪口を平気でいえるのは友だちです。一緒にいるとその頃に戻りますよね。たぶん皆さんもそうだと思いますけれども中学、高校のときの友だちはかけがえのないもので、学生時代の友情はすごく大事ですね。本当に利害関係がないですから。中学1期生はいまでも時々集まります。やっと最近になってゆとりができたのでしょうか。そうするといろいろな人がいるのですよ。社長になっている人もいれば、大学の教授になっている人もいるし、いまだに仕事がなくてふらふらしている者もいる。「俺また失敗しちゃったよ」などといって。そうしたこともお互いに共有できるのですね。30年、40年前に先生が打たれた手だと思うのですが、それがいろいろなところで生きてきている、と自分なりに自分を客観視して思いますね。その根本が友情ですね。すごく重要ですね。

三つ目に、「生涯にわたって、求道者であれ」(同 66 頁)。

四つ目は、「忍耐する勇気を忘れるな」。

高校生のとき、これはなかなかわかりづらかったです。だけどいろいろなことがあったときに我慢できなくなって、何かをやったり、何かいったり、何かやけくそになったりすることもあるわけですね。それをおさえるのはなかなか大変ですね。その大変さのことを先生は勇気という概念で捉えています。「くそっ」と思っても、「くそっ」にしないでぐっと飲み込む。これはすごく勇気が必要なのですね。

「思いませぬ境遇に陥ったとき、忍耐という勇気を決して忘れてはならない」。「まことの忍耐は、勇気を必要とする」。「忍耐する勇気を忘れるな」(同 68-69 頁)。

それから五つ目に、「人の一生において、もっとも優先すべきものは健康である」(同 69 頁)。これはまさにそのとおりです。至言です。いくら能力が高くても、いくら先見の明があってもいろいろなことが考えられても、健康じゃないとだめですね。人間の能力のなかでもっとも大切な能力、これは健康です。健康じゃないと考える気がわきません。すぐ嫌になってしまうし、すぐゴロゴロしたくなってしまう。健康が一番大事ですね。健康であれば同じことを30年間いい続けられすごいことになるのですよ。健康じゃないとできないことが沢山あります。

健康の話がぐっと深まります。次の段階。五つの提言の二つ目。今度は、1973(昭和48)年4月7日の創価中学、高等学校第6回入学式です。

まず、一つ目「丈夫に育て」(同 72 頁)。

このときのフレーズは、近眼、虫歯、猫背に注意。先生が語られました。いまだに残っています。近眼じゃだめだよ。それから虫歯は胃腸をこわす原因になる。もっともいけないのは猫背だ。猫背になると内臓を痛めるよ、と。本当に細かいところまで話をされたのですね。たぶんご自分が若い頃、病気で本当に苦しんできたからだと思うのです。年がら年中、寝汗をかいていたと時々お話しされます。いろいろな病院も行かれたようです。結核でいろいろな病院に行ったけれどもなかなかいい病院がなく、快癒につながらなかった。その頃はたえず熱があるし、うかされているし、そうするとものを考えられないのだよ。やはり健康が大事だよ。こうおっしゃっていますね。一貫しています。近眼になっちゃいけないよ。虫歯に気をつけなくちゃいけないよ。猫背になっちゃいけないよ、といわれています。僕も注意していたのですが、真っ先に敗れたのが近眼です。電車のなかで本を読んでいつのまにか近眼になりました。高校生のときに眼鏡をかけはじめました。その次に虫歯。歯を磨くのが面倒くさいから歯を磨かなかったら、いつのまにかぼろぼろになってきまして。それで、これだけは守ろうと思って僕、猫背にならないように、これだけは守っているのです。姿勢がいいですね、と学生からもいわれます。姿勢って、学問の姿勢とか生きる姿勢とかとは違うのですね。体の姿勢がいいということなのです。なんの褒め言葉にもなっていない。あるとき、背筋が伸びていますね、というのですけど、それだけです、私。このなかで守れているのは一つだけ。

次に、「精神を鍛えよ」。学校というところは、「精神を鍛え、人間をつくる場所である」（同75頁）。

精神を鍛えなさい。これが二つ目になります。

三つ目。「人間連帯」（同77頁）。

あたたかい友情。同時にその友情というのは賢いものでなければならない。あたたかく賢明な友情連帯をきなさい。これが「人間連帯」ということです。さっきの話と同じですね。

そして、四つ目。「素質を伸ばそう」。

素質。人にはそれぞれ向き不向きがある。先生や友だちが忠告してくれることがあったら、よくよくかみしめてみる必要もある。

「心構えを学び、学問を学び、すくすくと若竹のように、まっすぐに素質を伸ばしていきましょう」（同79頁）。

入学式ですから。これから新しい生活に入る生徒たちですから、こういう励ましをされました。

それから五つ目。

「知を愛する精神でいこう」。

学問です。勉強ですね。

「学問というのは、なかなか峻厳なものであり、文字と道理をとおして、全人類、全自然、全宇宙と対話をしていく仕事でもあります。短気を起こしてしまえば、学問にならなくなってしまう。根気が学問をもたらすものであります」（同81頁）。

根気ですね。さっきの忍耐と勇気を忘れるな、の変形ですね。根気です。そういうことをおっし

やっています。

これが、昭和48年当時、東京・小平の創価学園の卒業式と入学式の五つの提言の真意です。この年、もう一つ新しい学校ができました。これが関西の女子中学、高等学校です。その第1回目の入学式で先生がスピーチされたものです。女子教育の1期生。その人たちに対して何をいわれたのか。

一つ目。「伝統」。「伝統というものは生まれるべきもの」だ、とおっしゃるのですね。

「理想を秘めた皆さんの日常の行動のうえに見事な伝統が生まれ」、「次の世代へと伝えられていく」。「この学園らしい、新しい、はつらつたる伝統を生んでいただきたい」(同83-84頁)。

それから二つ目の「平和」。

伝統の次は平和。これは皆さんよくご存知の有名なフレーズですね。これはこのときにはじめて先生が発言されています。

「他人の不幸の上に自分の幸福を築くことはしない」(同85頁)。

それこそが平和の原理だ、ということです。

「なにゆえ平和がおびやかされているのかといえば、危機の本質を見極めようとしなからであります。すなわち、その本質は人間自身にあるということであります」(同84頁)。つまり、人間です。他人の不幸の上に自分の幸福を築くことはしない。これを守り合っている。こうおっしゃっていますね。皆さん、これらは一度は聞いたことがあると思います。

それから、三つ目が「躰」です。

「生活が闊達に、円滑に、楽しく回転するためには、そこに一つのリズムがあります。このリズムを体得することを、私は躰と申し上げたい」(同86頁)。

先生は女子学園へ行かれると、一緒に食事をとられることが多いのです。一緒にお昼ご飯を食べながら、全生徒と懇談されていますね。そのなかで躰ということについて一生懸命考えられたのではないのでしょうか。とても重要なことですね。もっとも重要な教育の場というのは、一家の食事の時間である。こういうふうにいる教育学者もいますね。食卓を囲んでの教育というのがもっとも効果的な教育ですから。よく僕たちは母親から、ご飯を一粒も残さないように、お百姓さんが一生懸命つくったご飯だから、というような教育をされました。いまだにご飯粒が残っていると気になって食べたりしていますけれども、そういうことなのでしょうね。そういう基準ができるのでしょうか。それが「躰」ということなのだと思います。

それから、「教養」。

「学問の道では、身に合ったものを深く追求するとき、はじめて教養になる」。

いろいろな教養の定義づけがありますがけれども、とてもわかりやすく、納得のいく定義づけです。何か見せかけの教養というものがあるということです、逆にいうと。身についてない教養が。そういう話ですね。

「身に合ったものを深く追求するとき、知識を生活の知恵と化することができるのではな

いか」（同 88 頁）。

知識がはじめて知恵になる、自分のものになる。こういういい方になる。

最後、五つ目。

「青春」。「青春は無限の歓喜とともに、またかならず心労がある、悩みがある。これは表裏一体であることを忘れてはならない」（同 89 頁）。

辛いこと、悲しいこと、いろいろなことがある。それを忘れるな。このようなことをずっと先生はおっしゃっています。このそれぞれの五つの提言。胸に深く残りますね。

ここからは私の体験談になります。昭和 48 年、高校 3 年生のとき、第 6 回栄光祭がありました。寺西さんや何人かのメンバーで僕たちは話し合っていたのです。高校の 1 期生が創価大学へ行って、3 期生までが大学に進みました。この頃の創価大学では、学園出身の生徒は、ほかの学生と一緒に一般入試を受けて、それで大学に入ったのですね。推薦入試などいっさいありませんでしたから。僕たちはいろいろ考えました。創価大学に行くことが本当に学園のためになるのか、それとも、国公立の有名な大学に行くことの方が学園のためになるのか。ちょうどその頃の学園は、東大の合格者を年々倍増していたのです。1 期生が 3 人。2 期生が 6 人。3 期生が 12 人、というように。今度は僕たちだから、24 名にならないかもしれないけれど、少なくとも 15 人か 16 人は合格しよう。寺西さんたちは東大を目指して、勉強していたのです。僕はちょっとへそが曲がっていたもので、東大なんか行くかと。でも、京都大学を目指していたのです。文学をやりたいだったので、日本文学を。京都大学に行こうと思って一生懸命勉強していました。受験専門校の駿台予備校へみんな誘いあって行ったりしていました。春休みにも行きました。国公立進学を目指すメンバーでかたまって勉強しました。偏差値がある程度にならないと入学できないわけだから、偏差値をあげようと思って一生懸命張りました。全国統一模試というのがあって、偏差値の標準が提示されるのです。ですから、そこである程度の偏差値にいくことも大事なんです。が、学園の場合は特殊な事情がありました。学園内の模擬試験で出てくる偏差値が一番あたっているのです。先輩たちの場合は、全国模試で通るといわれても、学園で通らないという偏差値が出ると合格しないのです。学園で通るといって偏差値が出ていて、全国統一模試で受からないと出る場合もありますが、合格するのです。つまり学園生に向けた、学園生の本当の実力を測るための模擬試験を先生たちがやってくださったのです。

1 学期には、僕たちも一生懸命勉強して、僕自身も京都大学に入る偏差値を越えたのです。寺西さんたちもそうだった。そうなったときに、7 月に栄光祭があつて、君たちは高校 3 年生だから、先生をちゃんとお迎えしなさい、と学園の先生方からいわれて、学園の玄関ロビーで、先生が到着されるときに、僕たち 10 人くらいだったと思うのですが並んで、先生をお迎えいたしました。車が入って来られて、車のドアが開けられ先生が降りられた。その第一声は、「全員、創価大学へ行きなさい。後輩たちのための捨て石になってください。その決意でやりなさい」。僕たちは学園のために国公立の大学に進学しようと思って、本当に辛い勉強をしてきたのだけれど、先生は「創価大学に行きなさい」とか叫ばれた。愕然としました。でも、諦めました。悩んだの

ですよ。栄光祭が終わった後の夏にも予備校に行きました。みんなで悩みました。どうしようと。先生がそこまでいわれているから、自分たちが創価大学へ行って、後輩たちのために道を開くことが正当な道なのだと、その秋くらいになって決意しました。その途端ですよ、僕が勉強しなくなったのは。でも、後から振り返ってみると、やはり先生にはそれなりの決意がおりになって、3期生までは大学に入ってきたけれど、4期生はちょうど1年生から4年生まで、はじめて大学で学年が完成する年度です。

いまになって考えてみれば、はじめてわかるのです。その頃は、なぜだと思ったり、不満を持っていましたが、いまになって考えてみると、最終的に4学年をきちっと整えて、大学の礎を築くということだったのかもしれません。創価教育を牧口先生、戸田先生からずっと引き継いできた、そういうお気持ちもあったでしょうから、そのことを実践する生徒をつくらなければいけない。そのようなことも考えておられたのかもしれません。後になって、それがだんだんとわかってきます。そのときは、もう本当に厳しかったですね。

こういう、先生の厳しいご指導がございました。もう一つあるのですけれども、1972（昭和47）年の8月6日、高等部代表の22名との懇談会がありました。各方面の代表メンバーが夏、先生のもとに集ったものですが、この時、東京代表として参加させていただきました。いろいろなお話をさせていただきました。このときも進学の話が出まして、先生が「学園生だな」といわれて、「そうです」とお答え致しました。「今年は中学1期生が卒業するときだから、君たちの学年から推薦入試をするよ」。こういわれたのです。驚きました。トップ・シークレットを、私は創始者ご自身から聞いてしまったのではないかと。「学園生が創価大学へ進学する場合、推薦入試にするよ。だからこそ、創価大学入学までに自分の好きな学問を思う存分にやりなさい。好きな本を思う存分読みなさい」と、話してくださいました。第6回栄光祭のときに、あの激しい口調で「創価大学へ行きなさい」といわれて、「推薦入学にしたから、思う存分自分の好きなことをやりなさい、そのための推薦入試なんだよ」ということですから、これはすごい親心だなと思いました。それから、本を読みました。好きな勉強は本当にやりました。僕は歴史が好きでしたので、いろいろな本を読んで、いろいろ特殊な勉強もやりました。それがとても楽しかったです。だから、大学入ってからも歴史を自分の専門にしようと思ったのです。それまでは、他の高校の人たちと一緒に試験を受けて、それで入学が決まっていたのですけれども、僕たちのときから推薦入試にいただきました。まさに特権ですね。ですから、僕は大学入学試験の経験はない。それが入学試験の説明をいまやらなければいけないのですけれども。このように、先生に守っていただきながら、高校生活を送りました。

さて、私たちの高校の卒業式が行われるというときに、先生が海外訪問されることになってしまったのです。1974（昭和49）年3月7日から4月13日に、約1ヶ月以上にわたる北中南米訪問が入ったわけです。僕たちは、先生と一緒に卒業式を迎えて、先生になんとしてもお礼を言いたかったし、先生のさまざまご指導や激励に対して、何らかの形でお応えしようと思っていて、いろいろな計画をしていたのです。2月24日、先生が「食事をしよう」ということで、

あるお店に生徒代表15名くらいだったでしょうかね、呼んでいただきました。そのときに創立者から「海外訪問のために卒業式に出席できない」とのお話を聞きました。中学1期で6年間授業を受けて、先生のもとで6年間過ごしてきたけれど、最後のときに先生と一緒にいられないのだ。なぜだろうと、すごく思いました。ところが、そのときに、そういう僕たちの気持ちを察せられたのか、先生は「そのかわりに創価大学の入学式の翌日に学園大会やろうよ」という提案をしてくださったのですね。「君たちの学年だけは一緒に記念撮影しようよ」。こういうお話をしてくださいました。卒業式に出ていただけないのは、ものすごく残念だけれど、こういうご配慮をしてくださっているのだな、ということもわかりました。

僕たちの卒業式である3月16日は、妙な感覚でした。先生がいらっしゃらない寂しさと、先生のご出席がないなかで卒業していかなければならないという気持ちと、それから先生が4月に入ってから僕たちのために大会を開いてくださるというご配慮に対する喜びと。そういうものが複雑に絡み合いながら、卒業式を迎えた記憶があります。僕たちも中学1期で6年間、監獄のような学園生活を過ごしたもので、二度と戻りたくない青春ですね。本当に厳しかったですから。それがあったから現在がある、紛れもない事実なのですが。本当にきつかったですね。高校のときも、たががはずれたように好き勝手なことやっていましたけれども。そういうなかで最終的な決着点をみたわけですから。それが創価高校です。

私たちの卒業式に、先生は訪問先からメッセージをくださいました。

「人間としての真価が問われるのは、これから二十年がかりの長いあいだだと思う」。つまり18歳で卒業ですから、だいたい40歳くらいで決まるぞ、というお話ですね。

「人というものは勝ったときに負ける原因をつくる例もあるし、負けたときに勝つ原因をつくる例もある」。「そうしてふるいにかけていくのであります」（同94-95頁）。こう、いわれたのです。僕たちは卒業式に先生に来ていただけなかったら負けたのだ、という気持ちがすごく強かったです。自分たちはこんなに出ていただきたいと祈っていたのに、叶わなかった。どうして僕たちはだめだったのだろう。こんなふうに思っていましたから、この激励はすごく胸に残りました。

「英知の原点と文明の基礎を悟った人は、賢者に育つ」（同95頁）。これが先生の訪問先からのメッセージで、これを聞きながら僕たちは小平の学園をあとにいたしました。

3. 創価大学の開学と創大生

創価大学の開学の頃の話をしていただこうと思います。

まず、創価大学の開学の第1回入学式。入学式の前に開学式というのがありました。1971（昭和46）年4月2日、戸田先生の命日にちなんで開学式が行われました。メイン・イベントは何かというと、A棟前に建っていますブロンズ像。一対のブロンズ像がありますね。

「英知を磨くは何のため 君よそれを忘るるな」

「労苦と使命の中にのみ 人生の価値は生まれる」

創立者の箴言が刻まれている、あのブロンズ像の除幕式がありました。除幕式で除幕をしたのが、アメリカ創価大学学長の羽吹好史さんです。高校を卒業してから大学に入学する前のことですね。

次に入学式。4月8日に入学式が行われました。創立者のご出席はございません。このあたりの状況については、『新・人間革命』第15巻の「創価大学」の章に詳しく先生が書いてくださいました。『新・人間革命』は、ずいぶん巻数が多くなってきています。そのなかで、いまだかつて「創価大学」の章の分量を超えた章はございません。最長の量です。

私たちも創価大学のことを、とくにたくさんの学生の皆さんに学んでももらいたいと思いまして、入学したときに、『創価大学創立の精神を学ぶ』という本を無料で配っています。このなかで一番ははじめに出てくるのが「創価大学」の章。つまり、創価大学の歴史を学んでももらいたい、共有してもらいたい、それが創価大学生としての第一歩であるということです。そのほか、草創の三部作と私たちが呼んでいる非常に重要な講演があって、それも全部出ています。海外での先生のご講演も入っています。創価大学に関係するものだけでまとめました。こういうものをつくって創価大学生としてお互いに共有しています。授業でも使います。第1回入学式のことは「創価大学」の章に書いてあるので、あえてここで語ることは省略いたします。入学式で新入生代表の宣誓がありましたが、現在理事長の田代康則さんがそれを述べられました。羽吹先生は皆さんよくご存知だと思いますが、学園に下宿生の会の栄光会というのがあるのですが、その責任者をされていました。つまり、下宿生の代表ですね。田代さんはずっと寮生の代表です。そして、通学生の代表は忍田和彦さんという方です。この3人が高校を卒業するときの創立者賞。振り返ってみると、ああなるほど、という感じですよ。ああなるほど、こういう先輩方がやってこられたのだな、と私たち後輩は歴史をひもとくと感じます。

開学してから、創立者は非公式には創価大学に来られているのです。いろいろな会合には来られているのです。1971（昭和46）年5月9日に創価大学を初訪問。これは公式の訪問ではなく、招待されてとか大学の公式の行事に参加するとかそういうことではなく、創価大学の学生代表との懇親会を大学で開いた。それで、ご来学になったということです。ですから、公式の訪問ではなかったわけです。これも、『新・人間革命』の「創価大学」の章に書いてありますが、なんとか創立者に公式に創価大学に来ていただきたい、1期生の先輩たちはそう考えたのです。教授たちは、創立者というのはお金だけ出していれば口を出さなくていいのだ、自分たちに学校の運営を任せてくれ、といういい方をしていた。創立者はそれを尊重されて、公式訪問をずっと遠慮されていたのです。それを聞いた学生たち、1期生の先輩たちが、なんとしても先生を創価大学にお呼びしたい、その気持ちから夏の会合の折に、「先生、創価大学に来てください」と直接、創立者にお願いした。「何かあるのかい」と聞かれたので、とっさに「大学祭をやります」、「…秋です」こういった。そのときは何も決まっていなかった。その瞬間に口から出ちゃったというのです。その先輩に聞くと。とにかく先生に来ていただきたい一心でいってしまったのです。その先輩が、大学に戻ってから大騒ぎになったらしいですよ。先生も「必ず行きます」と応

えられている。夏休みは総力をあげての準備だったようです。それが、11月21日から23日までの3日間に行われた大学祭、まさに学生たちの要望で実現した第1回創大祭です。これが創立者のはじめての公式訪問でした。先生ご自身もすごく喜ばれて、学生が呼んでくれたから来たのだ。学生のためにだったらなんでもするよ。これが先生の基本路線ですね。この段階、この時期に、学生のためにとか、大学は学生のためにあるのだ、学生第一だ、というような大学は、調べていただければわかりますけど、一つもあります。一つもない。いまでこそ、18歳人口も減ってきて、受験生も減ってきているから、みんな受験生のために、学生のためにといっていますが、当時は全然違います、状況が。そのなかで学生のために、と発言されたのは先生以外、創立者以外いっしょらない。ここに大きな、ある一種の大学革命の第一歩が刻みつけられています。私たちはもっとそれを誇りに思うべきだな、と私たち創価大学関係者は思っています。調べれば調べるほど、強く、もっと主張していいのだと自信をもっていえるものになりつつあります。それをふまえつつ、第1回創大祭のフェスティバルにご出席いただきました。

第1回創大祭のフェスティバルでスピーチをされています。これが先生の創価大学における公式行事での発言ということになります。

「人間社会においてもっとも大切なことは教育です」。「学生と教師との関係というものは対等です。そうした人間関係の絆があつてこそ、世界的な学問を打ちたてる偉人、立派な平和の指導者が輩出してきた」（『池田大作全集』第59巻18頁）。

じつはこの発言が、先生のさまざまな講演のもっとも基礎的なところになっているのです。これを学生にも、それから、大学の教員にも、大学に関係する人たちにも訴えたい。人間と人間が対等のなかで、ある種の知的な好奇心を追及する。それこそが本来の教育だという話ですね。教育というと、一方から片一方に水が流れていくような、伝えることのように思っているかもしれないですが、じつはここで先生がおっしゃりたいことは、教育はそうではない、教師と学生が一緒になってつくるものだ。どっちかが偉いとか、どっちかが偉くないとか、どっちかが教わるとか教わらないとか、そういう話ではない。先生の心のなかに沈殿している思想とでもいえますが、それが学生の姿を見るなかで、だんだん爆発してくるのですね。噴出してくるのです。これは絶対いなければだめだ、という感じになってくる。大学での先生のご発言を追いかけていくと、それがわかってきます。いま僕は、先生の発言に補助線を加えて、皆さんの視点をそこに向けていただこうと思っている、一つの事例です。

翌年になりますが、滝山祭という寮のお祭りが行われます。現在は滝山寮以外にも寮があるのですが、もっとも古いのは滝山寮です。栄光門を出て、少し上っていくと、4つ大きな建物が並んでいて、それが滝山寮です。僕も大学1年生のときに滝山寮に入りました。できたてで、まだコンクリートの匂いが少し残っているような、そういう寮でした。

寮というのは、いいところと悪いところが併存してしまってますね、僕らのときもそうでした。そのときは12人部屋なのですね。10代後半の男の子たちが12人集まると、いったいどういうことになるのか。こんな感じになるのです。過去形ですからね、いまは10人部屋だし、もうち

よっと知的だから、こんなことはないですが。僕らのときはわりとバンカラな人たちがいっぱいましてね。僕が寮に入ったときはびっくりしたのですが、いろいろな地方から来ていて、言葉も通じない。方言でいわれても、何いつているのかよくわからない。そのようななかから生活がはじまった。たとえば、僕の自宅から小包が届く。大学から帰ってくると、僕の小包がいつの間にか開いている。食べ物が入っていたようで、それをみんなが食べている。あれ、とか思いながらですね。まあ、その逆もまたありき、ですけど。共同体ですね、ひもじかったら助け合うという相互扶助。そのようなものですよ。年がら年中お腹が減っているのですから。

いまでも時々寮生が集まると笑い話になるのですが、寮の施設が大したことがなくてですね。とくにずっと印象に残っているのが、寮にコカ・コーラの自動販売機があったのですよ。それがすぐ故障する。一番ひどかったのは、お金を入れて、はじめに出てくるのがコーラの液体、その次に氷がガサガサと出てきて、最後にコップがコトって出るという。勘弁してくれ、と。何だ、この機械は。そういうような感じでした。いま考えると本当に面白かったですね。逆にいえば、そういう事件がなかったら寮生活には、何の印象も残らなかったと思います。いろいろなことがありました。楽しい寮生活でした。その寮で、1学期が終って帰省前に祭りをやろう、と。学園の栄光祭の雰囲気が多少残っていましたから、1期生の先輩たちも自分たちでお祭りをつくりたかったのでしょう。

1972（昭和47）年7月6日、先生がこの滝山祭のためにご来学くださり、スピーチしてくださいました。あの、滝の詩を紹介して下さったのが、じつはこの第1回滝山祭だったのです。先生がスピーチのなかで滝の詩を学生たちの前で述べて下さったのです。以前に詠まれた詩ですけれど、そこで紹介して下さったのです。なぜかならば「滝山祭」、「滝」だったからです。

「昨年の6月、日本有数の名勝とも言われる奥入瀬溪流に立ち寄る機会がありました。そこには、たくさんの滝が流れておりました。それを写真にとり、ある友人に」、「文を裏に書いて、贈ったことがあります」

ということで、

「滝のように 激しく
滝のように 弛まず
滝のように 恐れず
滝のように 朗らかに
滝のように 堂々と

男は 王者の風格を持て」（『池田大作全集』第59巻20-21頁）

この詩をこのときに紹介して下さっています。ですから、さまざまな機会に先生が学生に伝えたことが、だんだんいろいろなところで伝わって行って、皆さんのお耳に入るようになってきているのではないかと思います。そのときにおっしゃったのは、

「人間の能力というのは、さほどの違いはない。ただ、一番大切なことは何か。それは目的をもっているか、いないか。使命感をもっているか、いないかである」。

こう、おっしゃったんです。それで、この時から一貫しておっしゃっているのは、

「皆さん方は一人一人立派な人格者である。日本でも何百という大学がある。世界を数えれば、何千、何万という大学があるでしょう。そのなかで、創価大学に入ったことを誇りにしていただきたい」「私は、既存の大学では、なすことのできない人間教育という伝統をつくりあげていきたい」（同 23 頁）

と先生ご自身が創価大学での教育を、人間教育を、ここで成し遂げたいのだ、と意思表示をされているわけです。

人間教育の伝統、

「この一点だけは、どの大学よりも、そしてだれよりも誇りとし、名誉として後世に伝えていただきたい」（同 23 頁）。

これが先生の一つの願い。この願いをすでに開学 2 年目の滝山祭のときにおっしゃっているというところに、私たちはもう一度立ち返る必要があるだろうと思っています。

さらに、その秋ですけれども、第 2 回創大祭記念フェスティバルにご出席されています。このときは、本当にさまざまな模擬店をご覧になって、ほとんどすべての模擬店をまわられたのではないのでしょうか。学生の作品を一つ一つご覧になって、最終的にこのフェスティバルに出席をされて、述べられています。その第一声は、

「私のモットーは『真実に勝る弁解なし』です。本日の、この創大祭という一つの事実のなかに、学生らしい諸君たちの姿勢、情熱というものが明確にあらわれている」。事実は何ごとにも勝るんだ。こういうようなお話からはじまりました。同じく人間教育の原点という意味で一言つけ加えておられているのですが、

「これが自分の一生の道だと決めたら、苦難を避けるのではなく、その道で、その立場で、断固として精進し、奮闘していくことです。そうした苦難を乗り越えなければ、本物ではないと思う。それが人間教育の原点です」（同 25 頁）。

自分の目の前に現れた苦難、それを絶対に乗り越えるのだ。自分が決めた道を諦めることなく追求し続けること。それが人間教育である。こういうようなことをおっしゃっているのですね。そのときにはじめて、創価大学を 2 年前倒して 1971 年に開いたという意味を教えてください。

「創価大学は、学園紛争の火が全世界に燃えあがっていたさなかに、新しい、真の学問・教育の場を現出すべき必然性の意味を含んで建設された大学です」（同 26 頁）。

先生が必然性という意味を含んで建設された、つまり、真の学問・教育の場を現出するのだ、そのためにつくったのだ。これが創価大学のある種、永遠の使命といいますか、目的といいますか、そういうものになっているのですね。

1972（昭和 47）年になりますが、学園紛争があって、最終的には東大の安田講堂での攻防で終わるわけですが、これは紐解いていくと、1967（昭和 42）年くらいの段階から徐々に学園のなかで、大学のなかで紛争が起こっていきます。とくに慶應大学が一番早いとされています。学

生たちに何の相談もなく学費を上げたということで、学生たちが大学の理事会を相手に、これはおかしい、と。学費の値上げを撤回してもらいたい、というところからはじまっていた。これが日本の学園紛争のはじまりですね。いろいろな本を読んで勉強してみると、当初は、学生たちが本当に純粋に、自分たちの大学にこうあってもらいたい、こうしてほしいと訴えるためにやってきた一つの運動だったのです。それが、だんだんエスカレートしていくなかで、まさに学生たちのスチューデント・パワーがすごく大きいものだ、と大人たちが気づくのですね。気づいた大人たちのなかでも、政治権力、政治勢力の人たちは、その学生の動きを利用しようとしはじめるわけですよ。だから、政治に全部結びついていった。最終的には、暴力革命を主張する、極端なイデオロギー論争のようになっていく。したがって、それは、政治革命、政争の具にならずに、純粋に学生たちの主張だけを持続していったのであれば、いわゆる大衆と呼ばれる人たちは、その学生に味方した可能性が高い。しかし、当の大学の先生たちは何をいていたか。こんな茶番劇につき合っている暇はない。あんな気が狂った集団を相手に、私はものをいう気はない。そんなことをいっている学者ばかりだった。これでは学生がかawaiiそうだと思います。

当時は僕たちも、実際には学生紛争の煽りを少しくらっているのですね。僕たちの先輩たちです、実際にそれをやったのは。僕ら高校生のときに、すでにもうはじまっていた。大学の影響を受けて、僕ら高校生のときに、たとえば都立上野高校がバリケードをつくってある種の運動をやっていました。自主授業等々ですね。それは、やはり自分たちが学びたいことを学ぶ、自分たちが教えてもらいたいことを教えてもらう。それが、本当の学問の場であるのに、いまの高校、大学はそうっていないではないか、という彼らの悲痛な叫びだったわけですね。先生がすぐに、これはなんとかしなければいけない、といわれました。学生第一というのはそこからくるわけです。学生のための大学なのだ、と。そこで2年前倒しをしたのですね。これが偽らざる創始者のお気持ちだと思います。

「当初は、昭和48年に発足する予定だった。しかし、あまりにも学園紛争が激しく、いろいろな意味を考えて、昭和46年に開学した。1期生、2期生は本来であるならば創価大学がないのに入ってきたことになる。ここに意味がある」(同26頁)。

こうおっしゃいました。「意味がある」というのは本当に意味深ですね。計画通りであれば、1期生、2期生が入っていなかったわけでしょう。でも、入ったのですよ。「ここに意味がある」と先生がおっしゃったのを、本当に意味があるようにしていったのが1期生、2期生です。「意味がある」と先生がおっしゃっても、その意味を本当に意味のあることにできるかどうか。現実には1期生、2期生が創価大学にいなかったら、アメリカ創価大学の羽吹学長いなかったでしょう。田代理事長もいらっしやらないのですよ。先輩たちがいなかったら本当に大学が成り立っていたのか、と思えます。つまり、1期生、2期生がいて、母校を護り、それから、たとえば政治の運動のなかでも、僕らの先輩で北側さんという弁護士の先輩がいますけれど、ああいう先輩たちがいなかったらどうなっていたのか。この先生のお話を聞いた1期生、2期生の先輩たちが、これは意味があることにしなければいけないのだ、意味のあることにすべきなのだ、ということ

黙々とそれぞれが自分の分野で頑張ってきた一つの結果として、現在、21世紀の創価大学があるということ。僕らとしては、こういうことを現役の学生たちにもっと伝えたいですね。本当にわかってもらいたい。それが創価大学の伝統になっていくのだと思う。

「それ故に、1期生、2期生の諸君は、どうか自分たちがこの大学の創立者であると自覚をし、本気になって取り組んでもらいたい」（同26頁）。

自分が創立者なのだ、大学をつくるのは自分だ、ということですね。最後にこういうことをおっしゃっているのです。これはすごく、僕は好きなのですが、好き嫌いでいっちゃいけないのだけれど、大切なことなのではないかな、と思っています。

「だれでも、逃れることのできない宿命というものがあります。そう肚を決めたとき、宿命は使命となって、その人の一生を輝かせるのです」（同26頁）。

こういうお話ですね。創立者は壮年、婦人に向かって話されているのではないですよ。そこが大事ですね。10代の後半、20代の前半の若者に向かって、こういう話を真剣にされているのです。これが、創立者の創立者たる所以なのだと、僕には思えてなりません。どこまでも若い人たちに信じて、その人たちの将来のことを一生懸命考えて、それでご指導してくださっている。こういう話は一つの法則ですから。それを多くの人にわかってもらいたいというので、創立者はいろいろな運動をされているわけですからね。それをつくづく感じます。宿命というものは、結局逃れられない。逃れられないと決めて、なんとかするのだと肚を決めると、宿命が使命になるのですから。自分でしみじみいい聞かせています。逃れたい宿命はたくさんありますから。

大学の式典としてはじめて出席されたのが、第3回入学式でした。さっき先生がおっしゃっていましたが、当初の開学は昭和48年だ、2年前倒ししたのだよ、と。当初の開学予定だった入学式に、はじめて出席してくださいました。これは1973（昭和48）年4月9日です。このときのスピーチがじつは、草創の三部作といま学生たちがよんでいる非常に重要なお話の一つですね。さまざまな講演がありますが、そのなかの原点。創価大学の源といつていいお話がここからはじまるのです。これはあとで考察をいたします。このあたり、あとでぜひともお話しさせていただきたいと思います。

第3回入学式が終わって、7月の第2回滝山祭にもご出席されました。1973（昭和48）年7月15日です。滝山祭というのは本当に微妙でしてね。何が微妙かというと、日時を見てもらうとわかるのですが、7月15日ですよ。梅雨が明けるとか明けないか、というぎりぎりのところで、明けたら勝ち、明けなかったら負け、みたいなですね。雨もすごく降るのですね。だから僕ら、滝山祭というと雨しか思い出せません。いつも雨との戦いでしたね。2回目は出席されて、こういうお話をされました。

「昨日、私は陶器をつくる展示会の方へまいりました。そこで、ぜひ書いてほしいといわれまして、白地の素焼きの大皿に『わが弟子よ 人間の 王者たれ』と、もう一つの大壺の方には『健康 栄光 英智 勝利 福運 情熱 正義』と書きました」。

こうおっしゃっています。それは今、当研究所に保管させていただいていますが、それを見る

と大皿の「わが弟子よ 人間の 王者たれ」と書いてある左側に4文字、小さい文字ですが、「満月之夜」とあります。満月だったのですね。満月が出ていた、それを先生がしたためてくださいました。もう一つは、壺のまわりに先生が書いてくださいました。こういう形で字を書いた後に焼いたのですね。これがなんとずっと寮に保存されていたのです。危ないといったらありやしません。誰かが何かして割れたらおしまいですから。本当に僕らもヒヤヒヤ、ドキドキもので。こういうものをつくられたということを知っていたものですから、寮を探そうということになりました。そうしたらさすがに探すまでもなく、ちゃんと保管してありました。寮生たちも、しっかりと受け継いできたのですね。しかし、創価教育研究所の方へ、「申しわけないのですが、私たちはこのまま保存する自信がありません。いつ壊すかもしれません。だから、研究所で保存していただけないか」といって、持参してくれました。それで研究所で保管することになりました。きちっとした形でとってあります。あの東日本大震災のときは、一番心配でした。よかったです。無事でした。割れていたらと思うと、胸が凍りつく思いです。こういうものも先生がつってくださいました。

今年の入学式、中国大使の程永華さんが出席されました。「日中友誼農場」という看板を入学式でご紹介したのですが、あの看板もうちの研究所で保存しています。ただ文字だけではなくて、物をとっておかなければいけないので、なかなか大変です。後世に伝えていくものです。やはり、現物というのは説得力があるのですよ。

先生が、その第2回滝山祭盆踊り大会で話されたフレーズ、まとめると七つになるのですね。

「第1に生涯、健康たれ」

これ、一貫してますでしょう。先の五つの提言。あのときと同じです。学園では五つの提言、創大ではこういう滝山祭でのスピーチ。このとき先生が考えられていることは、まさに大学でも学園でも同じことをいわれている。

「健康たれ」、「青春たれ」、「栄光たれ」、「福運をもて」、「勝利者たれ」、「英知の人たれ」、「正義の人たれ」(同48-49頁)。

正義がやはり最後にくるわけですよ。先述の「正義」の定義づけはあれでいいのではないかなと。

「正義の人たれ」

たえず庶民の側に立て。苦しんでいる人のために働け。これはそういうことだと思いますね。それを一貫しておっしゃっています。

4. 草創の三部作を読む

さて、「草創三部作」という言葉・用語をお聞きになった方もいらっしゃるかもしれません。創価大学にお子さまとか、ご家族が行かれた方は、どこかでお耳にはさんでいるかもしれません。学生たちが草創の三部作といっている創立者の講演があるのです。この講演が私たちにとっての原点です。なぜかという、ここにすべてが含まれているから。僕たちが学ばなければいけないこと、僕たちが基礎にしなければいけないものを先生が述べられています。

三部作だから三つあります。その一つが、第3回入学式の「創造的人間たれ」とタイトルされた講演です。講演の時間的にいうと、かなり長いものです。それを、第3回入学式ですから、新生入生に対して述べておられるのです。二つ目が、第2回滝山祭の記念特別講演ということで、「スコラ哲学と現代文明」。1973（昭和48）年7月13日に話されました。学生たちは、この「スコラ哲学と現代文明」がもっとも難しい講演だというのです。非常に難しい講演だったと。僕も後から読ませていただきましたが、非常に難しいです。当時の現役学生が聞いて、理解できたかな、と思うような内容ですが、あえて先生がされています。そして、これが最後。肩の力を抜いて聞いていいのだよ、皆さんに報告的な話をするのだけれど、ゆったりした気持ちで聞いてください、ということではじまったのですが、最初の二つを踏まえ、最終的にまとめるようなお話である第4回入学式の「創造的生命的開花を」です。1974（昭和49）年4月18日です。この第4回入学式は、僕自身が聞いています。これは大変なお話だなと思ったこと、そういう印象が残っています。

それでいつの頃からか、学生たちはこの三つの講演を草創の三部作というようになりました。いつ、誰が、どこで、どういうふうにしたのか、ということがわからなかったのです。それを、この夏季大学講座を一つのチャンスにして調べてみようと思ってですね、一晩、寝たり起きたり寝たり起きたりしながら考えていたのです。朦朧としながら朝起きて、調べはじめたのです。

三部作という言葉の意味は、三部にわかれながら、互いに主題が連絡を保つ一つの作品。それぞれ違うときに話されているのですが、実は一つの主旨として話が貫いているのです。したがって、この三つを読まないと創価大学の原点はわからない。創立者の思いがどこにあるのか理解できないということで、創大に所属をしている学生たちもこれを勉強しあっています。いままで、入学式は40数回ありました。いろいろな講演があって大切なお話はたくさんあるのですが、この原点に立ち返っています。永遠に変わらない重要なものだと思っているところです。朝からずっと調べて夕方4時くらいになってははっきりしたのですが、はじめて草創の三部作という用語が公表されたのは、1990（平成2）年12月5日という日付がついた『Second Wind』。創価大学にも学生自治会というのがありまして、学生たちが、学生たちのためにつくった組織です。先生方から何かいわれたからではない、学生たち独自の組織がありまして、その組織の機関誌である『Second Wind』のなかに出ていました。1991年度中央執行委員長の公約の紹介のなかで述べられています。辻本広宣さんという当時、人文学科3年生で、この方が1991年度の中央執行委員長になられたのですが、その公約のなかで、「各学部生を対象に『創立者の語らい』学習会を開催」。『創立者の語らい』というのは、開学以来先生が述べられてきた講演やスピーチをまとめた本です。「特に草創三部作（第3回入学式・第2回滝山祭・第4回入学式での創立者のスピーチ）を中心とした集中学習会の開催」。こういう文言で『Second Wind』に書いているのです。この文言が、僕たちが調べたかぎりもっとも古い。草創の三部作という文言は、1990年代に入ってからだと、はじめてわかったのです。ずっと昔から語り継がれているように、これが一般化しています。これが、その出所でした。1990年になってはじめて語られるようになった。

一作目の第3回入学式は、1973年ですから20年近くたって学生たちが、これこそが草創の三部作だ、といいはじめたのです。それは、一貫してこの三つの講演が重要だということを自覚し続けて、それが繋がっていったのです。僕たちが学生の頃も、創立者講演の学習運動をやっていました。なんとしても、先生の思いを知りたい、わかりたいと思ってやっていました。でもその頃は、草創の三部作といういい方をしていません。ただし、草創の精神を貫き通そうではないか、草創の大学を建設しようではないか、といういい方はしていました。この三作が創価大学にとって重要な創立者のご講演であるという問題意識は、1990年代より前、1984（昭和59）年の段階で意思表示がされているのです。10年一区切りといいますが、第4回入学式は1974年です。10年たった頃、学生たちがそれを読み返して、やはりこれが大事だ、と思ったのです。

さて、これがなんで三部作といえるのか、というその証拠。これも探らなければいけないですよ。ただ三部作、三部作と僕らが叫んでいるだけでは、三部作にはならないわけですから。学生たちがこんなものをつくっていたのですよ。「草創の三部作研修ノート」。先生が講演された内容を細かく調べて、その専門用語から何から調べてノートにして、みんなに提供して、そして、学生がそれを見ながら読む。逆にいえば、そういうふうに調べて、用語とか何かをみんなに示さないと読みきれないのです。本当に難しいです。いま僕が読んでも、難しい箇所がいくつもあります。そういうものですね。

草創の三部作を読むという講演シリーズを創価教育研究所でやりました。『創価教育研究』という研究紀要第3号に収録してあります。3名の教員が、それぞれの講演を自分なりに読み込んで、学生たちの前で話をしてくれました。これが草創の三部作の研究史、研究の歴史です。杉山由紀男先生。現在、文学部教授で4期生、僕と同級生です。この方が、「第3回入学式創立者講演『創造的人間たれ』を読む」。森幸雄先生。現在、文学部教授です。この方は、マス・メディア論、社会調査の専門家ですが、創価中学1期生で同級生です。「第2回滝山祭創立者講演『スコラ哲学と現代文明』を読む」。一番難しいのを森先生にやってもらいました。それから、水元昇先生。この方は、短大の学生部長ですね。この方も、創価高校の4期生です。「第4回入学式創立者講演『創造的生命の開花を』を読む」。奇しくも、森先生が中学の1期、水元先生が高校の4期、杉山先生が大学の4期と4期生トリオでやってみました。自分で聞いた、ということで。この3つの講演が三部作だと認識される要因、なぜ三部作というのかというと、それぞれの講演が、大学論、文明論、創価教育論、そして、創価大学、創価大学生のあり方を明示する、という統一のテーマのもとに語られている点です。これを読んでいただくと、先生が何を考えて大学をつくられたのか。先生ご自身が、大学とは、文明とは、学問とはいったい何なのか、これをきちんとした形でご自分なりに分析をされ、提起されています。たとえば、三部作の理由になる文言ですけども、4月に第3回入学式で「創造的人間たれ」の講演をされました。その7月に第2回滝山祭「スコラ哲学と現代文明」の講演、その文言です。

「4月9日の入学式の折、少しばかり大学というものの発祥についてお話いたしました。が、その中で、近代文明をもたらしたルネサンスの精神に触れました」（『池田大作全集』第

1 卷 377 頁)

と話は続いていくのです。つまり、入学式のときに話はしておいたのだけれど、さらに続きの話をするよ、ということで完全に継続性が認められます。一つ目の作品があって、二つ目の講演がある。これが繋がっている、ということがこの文言からよくわかります。先生ご自身のなかでも繋がっています。三つ目は第4回入学式。

「昨年の第3回入学式の折、少しばかり大学の発祥について、歴史をさかのぼって考察を加えておきました」（『池田大作全集』第59巻55頁）。

同じ趣旨の文言ですね。大学の発祥について述べられた、ということです。この新しい大学をつくるときに、大学というのはいったいどうやってできたのかを知ることが非常に重要だ、という先生の問題意識です。それを考えるにあたって、人類が大学というものを手にしたのはいったいどういう理由で、何のためにつくったのか、ということをおもひに話しておきたかった。こういうことですね。

「そのとき、大学というものが制度や建物からではなく、新しい知識と学問を求めようとする若者の情熱と意欲から起こったものであることを、述べておきました」（同55頁）。これが三部作一つ目の第3回入学式「創造的人間たれ」という、一番はじめの先生なりの要約です。

先生が講演で一貫して述べられていますが、そもそも大学はどうしてはじまったかという、その発祥はだいたい11世紀くらいですね。僕の問題意識はいったい何かというと、一つは、近代という時代性にあります。「近代」とよくいいますね。「近代」とはいったい何か。その具体的な姿は「西欧化」といっていい。つまり、自分たちの民族の歴史や文化を置いておいて、ヨーロッパのシステムをとり入れる、ということです。世界で、何か公的なセレモニーがあれば、どの民族でも、誰でも、だいたいワイシャツにネクタイですね。スーツを着用するではないですか。そこへ、たとえば日本の政治家が着物を着て行きますか。羽織と袴で行きますか。行かないですよ。アフリカの人たちだってそうです。中国の人たちも同様です。近代化はイコール西欧化です。西欧化は、その内容を具体化すればキリスト教化のことです。キリスト教という宗教を基盤にもった一つの文化です。キリスト教とはいったい何なのか。キリスト教の研究者のなかでいろいろな議論が起こっているのですが、簡単にいえば、もともとはユダヤ教です。ユダヤ教の神をよりわかりやすくするために、イエス・キリストを打ち立てて、キリスト教をひらきました。それを、さらに簡単にしたものがイスラム教です。だから、ユダヤ教とキリスト教とイスラム教というのは神が一緒です。とらえ方が違うだけです。ヨーロッパではキリスト教を基盤に貫き通していますが、ある時期神は本当に存在するのか、という問いかけがある。神は本当にいるのか。神というのはいったい何なのか。そして実際自分たちの生活で起こっていることと神は、どういう関係性があるのか。だんだん、こういう話になっていくのです。そもそも神は絶対的に正しいものなのだ、といい続けてきたのは教会。教会は、後継者を育てるために、一生懸命いろいろなことをやって、次の世代の聖職者をつくっていきます。

今度は、中近東のほうから、いわゆる古代イスラム系の文明が入り込んできて、これは、西欧のキリスト教に相對峙するものなのですね。全然違うものをもって来る。それがものすごく若者たちに評価される。若者たちは、この真理は何であるのかを追求したくなるのです。そうなると、それまで、次の世代の聖職者たちをつくっていた、そこに集まってきた優秀な学生たちが、どんどん違うところへ出て行ってしまう。その出ていく先が大学だった。つまり、先生がおっしゃったように、真理を知りたい、神は存在するのか、神とはいったい何なのか、この世は神がつくったというけれども、神はなぜこのようなものをつくったのか、それが知りたい。ところが、これは教会では教えてくれないのです。そういう若者たちがだんだんと集まることによって、成り立ってきたのが、大学なのですね。

今度はそれに対抗して、キリスト教としては、このままだったら自分たちの教団がもたない。自分たちの教団をもたせるためには、若者たちを集めなければいけない。そのためにつくった組織が修道院。だから、修道院で行われたのは、神はいかに偉大であり、真実であることを教えようとしたのです。三部作のうちの二つ目の「スコラ哲学と現代文明」で、御用学問といわれた「スコラ哲学」が取り上げられるのです。難しい話になってしまいますが、人間が真理を探究する、宗教を乗り越えて探究する、宗教とどういう形で折り合いをつけるのか、宗教は人間と別世界にあるものなのか。また逆に、宗教は人間を拘束するのか、というようなこと全部を含めて真理とは何か、という話です。僕は歴史の勉強をしているものですから、ちょうど50代に入ってから、西欧化とはキリスト教化であって、キリスト教とはいったい何なのか、ということに興味をもちはじめ、この2、3年ずっとキリスト教を勉強しはじめたのです。そのときに、はじめて、先生が大学をつくるといった意味がなんとなくわかった気がしました。1974（昭和49）年は、先生は40代です。先生が40代の頃から、ずっとこういうことを考えておられたことに愕然としました。

この三部作を丁寧に読んでいくと、非常に論理的にまとめられていることに気づきます。まず大学の発祥の歴史が述べられます。そして、近代文明がはじまった時に、哲学と思想と学問が復興するということです。復興とは、いままで語られてこなかったことが、改めて語られるようになるということです。古代ギリシア、実際には、ギリシア哲学、アリストテレスの哲学の影響で、中世の神学、キリスト教のありようが揺らぐのです。それをどう考えていくか、ということが述べられています。最終的に文明論と学問論になって、このタイトルにもついています「創造的人間であれ」、こういう話に繋がっていくのです。

ある先生が、「神立先生、創価大学ではキリスト教やマルクスのお話をしてもいいのでしょうか」と聞かれるのですよ。「それは結構です。うちは、学問は自由です」と答えるのですけれど、自分でもちょっと毛嫌いしたところがあって、避けていたのです。しかし、これは避けてはだめだな、とあえてチャレンジしてみたのです。すごく面白かったです。いろいろなことがわかりますね。創立者は、価値創造による創価大学の使命を明確に述べられているのです。この第3回入学式の「創造的人間たれ」で、

「社会に必要な価値を創造し、健全な価値を提供し、あるいは還元していくというのが、創価大学の本来めざすものでなければならない」（同 38 頁）

と述べられています。ここが、第3回入学式の講演の大きな提言の一つ。創価ですから価値を創造しなければならないのです。価値を創造するためには何が必要なのか、そういう論理の展開ですよ。ここで、あるべき大学像が明示されました。

二つ目の「スコラ哲学と現代文明」では、文明発祥の歴史的意義について述べます。知性と理性。知性と理性と信仰は、どういう関係性にあるのか。はたして、知性と理性で、宗教が理解できるのか。逆にいうと、宗教は、知性と理性できちっと証明できるのか。もし、それができないのであれば、それは宗教としておかしいわけではないですか。こういう話になってきます。文化論、文明論、学問論、大学論、そして、最終的には、教養の概念にいたるまで先生が述べられています。明確な定義づけがあります。

「現代を導くに足るだけの哲学の樹立」（『池田大作全集』第1巻 391 頁）と叫ばれて、この「スコラ哲学と現代文明」をくくっていきます。

さらに、三つ目「創造的生命の開花を」。大学、そして、創価大学生像の明示です。やはり創造という言葉が出てきます。

「私の胸にあふれてやまぬ“創造”という言葉の実感とは、自己の全存在をかけて、悔いなき仕事を続けたときの自己拡大の生命の勝ちどきであり、汗と涙の結晶作業以外の何物でもありません。“創造的生命”とは、そうした人生行動のたゆみなき錬磨のなかに浮かび上がる、生命のダイナミズムであろうかと、思うのであります」（『池田大作全集』第59巻 64 頁）。

そして、

「“創造的生命”の開花を、私はヒューマン・レボリューション、すなわち『人間革命』と呼びたい。これこそ諸君の今日の、そして生涯かけての課題なのであります」（同 66 頁）。こう述べています。第3回入学式「創造的人間たれ」の創造的人間とはどういうことなのか。

「創造の仕事は高い山のようなものであり、それだけの高さに達するには、広い裾野と、堅固な地盤を必要とするものであります。幅広い学問的知識と深みのある思索の基盤のうえに、初めて実りのある創造の仕事ができるわけであります」（同 38 頁）。

つまり、何もしないでいて創造なんてできない。創造というのはあくまでも学問だ。そして、真剣な思索をもとに生まれてくるものだ。それが創造的人間だ。それから、

「生命・人間を直視し、その開発をめざしたところに、学問の自由な発達があり、ひいては、文明の絢爛たる開化があった。創造性の鍵は、まさにこの一点にあると私は思う。創価大学は、この人間学の完成をめざし、その厳然たる基盤のうえに、学問の精華をちりばめていただきたい」（同 41 頁）。

自分たちでこの大学をつくっていかなければいけない。そのために、君たちが創造性を発揮しなさい。発揮するためには学問を知らなければならない。では、本来の学問とはいったい何なのか。

これは、教師と学生がまったく別の存在ではなくて、学生と教師がともどもに力を合わせながら、つくっていくものである。そして、その場こそが大学だ。こういう展開です。こうもおっしゃっています。

「創価大学に現に属する人々、また将来、志を同じくして加わってくるであろう人々の全員が、一つの生命体となってこそ、その開花をもたらすことが可能となる」(同 45 頁)。

これは第4回入学式の話です。

以上のように、この3回の講演は、非常に重要なものであると思います。いま学生たちが一生懸命勉強しようとしているのですね。私たちも、これが創価大学にとって伝統的な、絶対変えることができない、半永久的な一つの指針だと思っています。だから、創価大学は、大学の本来あるべき姿であり続けなければならない。先生の一つの理想ですね。本来、大学ができたのは何のためなのか。なぜつくったのか。それは、若者たちとの真理の探究の場であるということが一つ。そして、なされるべき教育の知の作業はいったい何かということ、創造である。

「社会に必要な価値を創造し、健全な価値を提供し、あるいは還元していく」(同 38 頁)、これが、知の作業をもとにでき上がっていかなければならない、というのですね。「正義」を定義づけしたときにも出てきましたね。これが、一つの定義づけだとすれば、健全な価値というもの苦しんでいる人、不幸な人たちのために何ができるのだろう、ということを考え続けること。その人の側に立つこと。それが、一つの価値として大事であると思います。これが、創価大学本来の目指すべきものでなければならない。そういうことがたえずできるようになることがヒューマン・レボリューション、人間革命という言葉で表されるのである。しかし、現実にはいま君たち自身がそうなってはいない。だからこそ、「諸君の今日の、そして生涯かけての課題」なのである、という示唆なのですね。これを追求するところに創価大学の創価大学たる所以があると思います。草創の三部作はもう少し深めなければなりません。もう少しわかりやすく、何とか説明できないかと思っています。草創の三部作を、皆さんに今日知っていただきたいかったのは、いま一生懸命現役の学生たちが勉強している、ということ。僕たちも一緒になって、これを一生懸命読みながら、創立者の創造性とはいったい何なのか、もっと普遍的に、もっと自信をもって、絶対これはこうだ、と語っていけるようなものにしていきたいなと思っています。

5. むすびにかえて

先ほどもお話ししましたが、僕たち中学1期生が卒業するときに、先生が、卒業式に出席できない、とおっしゃって。何となく僕たちが寂しい思いをしていたのを、先生が見透かすかのように、「大会をやろう」と提案してくださった。そのことを頼りにしながら納得をして、僕たちは僕たちなりの卒業式をやったわけですが、その約束の日がやってまいりました。

草創の三部作という話をしましたが、草創の三部作の一番最後の第4回入学式がこの前日でした。1974(昭和49)年4月18日です。その翌19日、私たちは学園に集まった。先生は中学1期生だけを呼んでくださるのではなくて、卒業生全員を呼んでくださった。つまり、中学1期生

が高校を卒業して6年間の教育が終わり、一貫教育の一つの結果が出たわけです。そして、それがまた、スタートラインになる。その創価学園大会で、こうお話をされました。

「皆さんを取りまく環境は、不満の連続であるかもしれない。けれどもそのなかであって、不満だけって終わってしまったならば、それこそ卑しい人生で終わってしまう。地獄の人生になってしまう。その不満というものを、自分の境涯を高め、また自分の力を深めて、なんとか身近なことからも満足できるように回転させていき、自分自身の人生の最終にあって、自分としては満足だったといえる人生を送ってほしい」（『池田大作全集』第56巻99頁）。

本当に一歩前進のためのお話ですね。やはり不満が多かったのでしょうかね、僕たちは。いろいろな不満をいっていたのだと思います。たぶん、そういうことが先生のお耳に入ったのかもわかりません。でも、それに対して、不満ばかりいっているのではない、一歩踏み出せ、と。こういう先生のお話であったのだらうと思います。

「人間があって、宗教があるということをいいたい」、「人間の生命こそ大切である」、「諸君は自分も大事にしなくてはならないけれども、人間を大事にしていきたい」（同100頁）。

先生のおっしゃりたいことが、一貫していることがわかりますね。平和も結局、人間が大事だ。戦争は結局、一人の人間を大事にしないから起こってくるのだ、と。一人の人間を大切にすれば必ず平和はくる。イデオロギー、思想性の問題だけではない。利害関係の問題だけではない。一人の人間を大事にすることだ。その大事にする仕方が、いろいろあるということなのでしょうね。そのときそのときの不幸な人間の側に立つ、庶民の側に立つ。どっちがその人のためになるのかを考える。どんな職業に就いても、どんな人生を歩んでいても、そういうような価値判断の基準をもちなさい。その価値判断にもとづいて、価値を創造しなさい。こういうお話になっているのでしょうね。先生のお話を読みながら今回、このように考えました。

この日の記念撮影は、画期的なものでした。学園の中庭に高校4期生が集まって、先生が真ん中に立ち、それで写真を撮ったのです。先生の隣に石田君という人がいるのですけれど、先生は石田君の肩に手をかけておられるのです。石田君、それが嬉しくて、顔が動いたときにシャッターが切られたらしく、石田君の顔がぼやけています。この写真は、創価高校4期生の卒業アルバムの最後に載っています。だから、何か辛いことや悲しいことがあると、この写真を見ます。同窓会で集まったとき、必ずこの写真を見るのですよ。それで自分がどこにいるのか探すのがなかなか大変で。昔の自分といまの自分があまりに違いすぎるから。やつはどこにいるとか、みんなでわいわいいいながら、その真ん中に先生がいらっしゃる。そういう写真ですね。

これで、学園の6年間が終わり、僕たちは大学等に進学いたしました。創価大学に来たメンバーもいるし、東大や京大に行ったメンバー、医学部に行ったメンバーもあります。創価大学の保健センターで、学生の主治医をやってくださっている根本先生も、中学1期生です。思い返してみると、先生が育ててくださった、その中学生が50代になり、やっと先生に喜んでいただける、

あるいは、先生のことを語っていける世代によくなったわけです。そのことを、自分でもしみじみ感じます。この思いをどうしたらいいかというと、これはもう、これからの学生たちに伝えていくしかないですね。

創価大学は皆さんご存知のとおり、入学式も卒業式も先生のご出席がなかなか厳しくなっています。でも、50年後、100年後を考えると、先生のご出席されない入学式、卒業式のほうが、じつは一般的になっていくはずです。それがあたり前になるわけです。先生のご出席されて、いろいろなお話をされたのは、本当に初期の頃の数年間、こういう話にならざるを得ない。だけれども、そこに、先生の思い、あるいは、戸田先生、牧口先生から受け継がれてきた創価教育の思いは、溢れるほどにある。それが創価大学だ、というようにしていきたいと思っています。

池田先生は時々、牧口先生の話をしてくださるのですね。自分たちの目の前に本当に牧口先生がいるかのような姿を池田先生は語ってくれます。もちろん戸田先生のことも。池田先生がご自身で、仕えてこられた方ですから、それはものすごくリアリティーのある語り方をされます。実際に池田先生は牧口先生に会ったことはないのです。お会いしていないのですよ。そうであるにも関わらず、池田先生が牧口先生のことをリアルに私たちに語ってくださる。それはなぜなのでしょう、と思ったのです。それは、一般的にいえば、法則性があるからだとか、何か同じことを考えているからわかるのだろう、という言葉になるのかもしれませんが、実際に考えてみると、おそらく、戸田先生が牧口先生のことが大好きで、それで、牧口先生のことを池田先生に、このときはこうって叱られた、とか、こういうふうにいわれたのだ、と池田先生に語られたのではないかな、と思うのですね。先生が戸田先生のことを語ってくださると、それはもう本当に戸田先生が、生身の姿でそこにいるように、僕たちには思えます。同じように、僕たちが池田先生のことを次の世代に語っていく必要がある。それを語り続けていくことが、この創価大学でもっとも大切なことだ、と思います。いままでいろいろな定義づけをして参りましたが、そこに創価教育という本来の教育のあり方、そして、その精神性というものが伝わるのだろう、と感じます。その意味で、今回、皆様方にお話したような話は、もうちょっと噛み砕くようにして、昼間の授業でやっていかなければいけない、と感じている次第でございます。今日は、夏季大学講座で、市民の皆さんにご参加いただいて、今日の授業が試金石になりまして、今後の授業にはね返ってくるということをしみじみ感じておりまして、御礼とともに、これからもまた創大のためにご理解、ご協力を心から念願をいたしまして、私の講義にさせていただきます。大変にありがとうございました。今後どうぞよろしくお願いいたします。